



SAIHIKA 201504

「えええ！？ 何故か文芸部の部室となった屋上で美人の先輩と一緒に本を読んでいたが寝てしまって起きたら謎のジャングルの中に移動していたと思ったがあんな空を飛んでいるのは太古の翼竜プテラノドンじゃないですかということは中生代白亜紀（約 8000 万年前）にタイムスリップしてしまった？？？ そして僕の横で寝ているのは僕が所属している文芸部の『相沢新月（あいざわ しんげつ）』先輩。この人は学校一の美人で僕はこの人目当てに文芸部に入ったんだよなあなんてことを思い出しながら、って、今が白亜紀だから僕が文芸部に入ったのは遥か未来じゃないですか、っていうタイムスリップジョーク。それにしても一人でこんなに喋っているのはなんだか悲しい。いつもなら先輩がなんやかんや言ってくれるのに……そういえば先輩はまだ眠っているのか。これは起こす必要があるんじゃないのか、お姫様を起こすのは王子様のキスだということで僕は先輩の顔を見るが、すいません。僕は肝心なところでヘタレなんですよね。眠っている女の人にキスなんてできないです。ヘタレですが紳士的とも言えますね。紳士である僕は先輩の肩を揺らそうとしたその時……」

「まったく……君は本当にヘタレだな……」

「せせせ、先輩！」

「せっかく寝ているフリをして様子を見ていたのに……」

「いやあ、チキンなもんで……」

「……甲斐性なし。折角……期待したのに」

「えっ？ 何だって？ なーんて嘘ですよ。ちゃんと僕は聞きましたよ。『折角君とキスできるチャンスだと期待したのに』先輩はそう言っていました。確かにそう言っていました。ゼウスに誓って」

「……君は本当に意地悪だな。そうだよ、私は……」

「そこで先輩が僕の頬に手を当ててその美しい顔が迫ってきて、云々……」

「という一人芝居。ああ、そうですよ。先輩はそんなこと言わないですよ。だからせめて妄想だけは美しくあってもいいじゃないですか。テメーの妄想なんざ聞きたくねーんだよ？ だめで～す。聞かないとだめなんで～す。というわけで妄想第二弾。プテラノドンがこっち見ててもしかしたら他の恐竜が襲ってくるかもしれないけどそんな事は関係ない。僕は僕の妄想を垂れ流すぜ。先輩の唇は……」

「キミは本当に何をしているんだ？」

「って先輩！」

「申し訳ないがキミの妄想は聞かせてもらったよ」

「うわああああああ。恥ずかすウィィィィイツ」

「私としても好意を持たれているのは嬉しいんだが、妄想はほどほどにね」

「はい！ 不肖『松平冥（まつだいら めい）』妄想はキスまでにします！」

「キスはするんだね……」

「すみません！ さて、先輩も起きたところで現状を確認しましょう。僕たちはどうやら過去にタイムスリップしてしまった。そして僕達の前方にはティラノサウルスと思われる恐竜。つ～ま～り～」

「ピンチだね」

「ははっ、流石先輩。こんな時でもクールでお美しい。だが悲しいかな。美しさは身を守るかも知れないがそれは対人関係においてのみ。このような物理的な生命の危機にはなんの意味も持たない」

「何を言っているんだキミは……。ほら、こっち」

「っと、先輩に手を握られてしまった。先輩の手は柔らかいなあなんて思いながら僕は導かれるまま謎の建物に入っていった」

見たことのある室内。なのに違和感？ 故に違和感。白亜紀になんでこんなものが……。

「先輩、ここは？」

「某ハンバーガーチェーン白亜紀店だ」

「！？」

「某ハンバーガーチェーン白亜紀店だ」

「白亜紀店ってことは、今の時代この店舗しかないんですか？」

「ああ、そうらしい。チェーン店なのにチェーンじゃない。まったく笑える話だ」

先輩のタイムスリップジョーク。笑おう。にやり。

「さあ、冥君。なにか頼もう。なにがいい？」

「あっ、えっと、デカイ奴のセットで」

「ふふっ、男の子だな。私は魚肉系のコレをいただく」

「△○×××△□>○●×」

白亜語を話す店員さんは全身真っ黒。ダークマターというヤツだろう。

「ありがとう。さあ、座ろう」

「先輩が頭いいってことは知ってましたけど白亜語も堪能なんですね」

「ああ、そうだ。白亜語はこの時代での共通語だから」

「プテラノドンとも会話できるんですか？」

「できるけど、私の話をまともに聞いてくれないからな」

「短気そうですもんね」

席につく。向かい合わせで食べる。

「こうしているとなんだかデートっぽいな」

「ブフウツツツ！！ せ、先輩とデート」

「はは。そんなにおかしかったかな？ ほら、口」

「ありがとうございます、ってコレは先輩のハンカッチ！」

「紙ナプキンの方が良かったかな？」

「いえいえいえいえ。ハンカチ使わせていただきます」

トイレで一人。鏡の前。

「二人っきり、なんだよな。……まあ、ダークマターさんもいるけど。ドキドキするなあ」

いかんいかんと顔を洗う。

「よしっ。この機会に先輩との距離を縮めてやるぜ！」

「ごめんなさい。付き合うことは出来ません。お友達でよろしくお願いします」

な、なんだこの映像は？

チキンの上にネガティブまで付属しちゃったらどうしようもないな。

行動行動。ポジティブ行動。

「新月先輩！ 一緒に出かけましょう」

「そうしたいのは山々だけど、外は危険だからね。中で楽しもう」

撃沈。でも、一緒にいられるのは変わらない。まだまだこれからだぜ！

一週間後。

「チキン野郎ですよ僕は。ええそうですよ。鶏肉ですよ親子丼ですよ。この親にしてこの子あり。

僕がチキンなのは父親が鶏だからですよ」

「親とはいえ人のせいにするのは感心しないな」

「すいませんごめんなさい嘘です。僕が悪いのです」

「ははは。つまりキミは私ともっと親しくなりたいということかな？」

「そうです！！ すんません！！」

「前にも言ったが、キミに好意を持たれるのは嫌じゃない。むしろ逆だ。だから、私もそう思ってる」

「そ、それはつまり」

「私も、キミと仲良くなりたいたいんだ。もっとね」

！？

「ありがとうございます！！」

「だから……」

だから？

「私と……」

おっ、おっ！？ これは、これはまさか！？ 新月先輩は立ち上がり、僕を見る。

そして、ファイティングポーズを。

「肉体言語で語り合おう！」

「ハイッ！ ワンツー」

バシバシッ。

「遅い遅い。そんなのじゃ誰にも当たらないよ！」

「197! 198! なに？ もう限界？ キミってそんなにダメなヤツだった？」

「さあ、今日のランチはゆで卵の白身とささみだ！ タンパク質で筋肉をつけるんだ」

「ふっ。今のキミの実力で私に勝てると思った？ 私の本気はこんなもんじゃないよ」

一ヶ月後。

「捉えた！ 鍛え上げたストレートオオオオ」

「カウンター！」

「ぐわあああああああああああ」

「甘い。甘いよ冥君」

「クッソ。完璧に決めたはずなのに……」

もう、立てない。今日はここまでか……。

「さあ、立つんだ冥君。私に勝つんだろ？」

「そうは言っても……」

汗だくの僕にタオルを差し出してくれた。

「●○××△□□>>#☆」

「ダークマターさん……」

ドキッとした。

この気持ち、まさか……恋？

そんなわけない。

僕が好きなのは新月先輩だけだ。

「×○○<□# \$ △」

笑顔が眩しい。ダークマターなのに。

僕はこの日からダークマターさんも気になり始めた。

三ヶ月後。

「か……勝った！！！」

「くっ……この私が負けるだなんて……強くなったね。冥君」

「やった！ やった！！」

「\$ □ △ & ○ ○ = □ ×」

「ダークマターさん。ありがとう」

「>><×」

「えっ、シャワーで汗流してくれるだって○??」

「□○○//」

「い、いやあ、恥ずかしいけど、お願い×△△」

「ちょ、ちょっと待って。わ、私も……冥君の××%\$\$」

「! ? × ○」

「○○×□△」

「×○●○△>△○○○×」

「△○●○○□△&<○」

「●○△○×●○△○×●&□##<△△□○□」

新月先輩とダークマターさんの二人の美少女に振り回されながらも、僕は幸せな毎日を過ごした。

一ヶ月後。

「幸せだね。冥君」

僕らの公用語は白垂語になった。ダークマターさんとも普通に会話できる。

「そうだね。ダークマターさん。あなたと一緒に過ごせるのが何よりも嬉しいよ」

「そ、そんな。恥ずかしいな」

「む。冥君、私と一緒に楽しくないというのか」

「勿論新月先輩も大好きですよ」

「大好きだなんて……」

ダークマターさんと僕。

新月先輩と僕。

三人で、ずっと……。

？

ちょっと待て。

ダークマターさんって誰だ？

白垂語？

何を言っているんだ？

というか、ここはどこだ？

たしか、タイムスリップして、恐竜の時代に……。

そしてここは某ハンバーガーチェーン店。

なんで当たり前のように料理が出てくるんだ？

シャワーも。

お風呂も。

なんでそんなものがこの時代にあるんだ？

立ち上がり、扉に向かう……。

「冥君？ 何してるの？」

「止めないで下さい先輩」

この先には、一体何があるんだ？

「そこから先は恐竜でいっぱいだよ。怖いよ」

「あなたがそれを言わないで下さいダークマターさん」

扉に、手を。

「やめてええええええええええええ」

ガチャ。

扉が開くと同時に……。

先輩に抱きしめられた。

「せ、せんば……い？」

「だめ。ぜったいだめ。ここから先に行っちゃ……。私を、一人にしないで……」

「ひと、り？ ダークマターさんは？」

「彼女も……私だから……」

「？」

「だから、だから……」

「ずっと一緒に、ね」

静かに、唇が。

重なった。

目の前には新月先輩。

綺麗な顔が涙でぐしゃぐしゃになってる。

僕は、何をしているんだ。

大切な人を泣かせて。

自分で自分が恥ずかしくなった。

そうだ。

これでいいんだ。

ずっと一緒に。

ここで暮らしていけば……

「ごめんなさい。付き合うことは出来ません。お友達でよろしく願います」
「そ、そうか……。いや、いいんだ。じゃあ、お友達で、よろしく……」
新月先輩は、泣いていた。

「僕が恋をしたのではない……？」
「そう。私が恋をしたんだ。君に」
「でも、僕は断った」
「私はその結果に納得がいかなかった。だからこんなデタラメな空間を用意した」
「じゃあ、僕が今まで接してきた新月先輩は？」
「私が創った。素直になれるようにおまじないをかけてね」
「もっとも、元が私だからそれでも無愛想になってしまったのだが」
「君にひたすら甘えられるような性格を創ったら、失敗してご覧のとおり真っ黒」
「それがダークマターさんということですか」
「ああ。すまないな。私なんかに振り回されて。でも、もういい。もういいんだ。君との時間は彼女らを通して私にも伝わった。偽りの関係だけど、私はもう十分だ」
「そんな……先輩……」

「ありがとう。大好きだった。世界で一番、誰よりも」

目が覚めた。

頭が痛い。

一体、どれほどの時間眠っていたんだろう。

一瞬のような、それとも……。

とにかく、行こう。

行かねないといけないところがある。

あの人の元へ。

学校の屋上。

何故か文芸部の部室の代わりになっているという。

そこには……。

長い黒髪、美しい女性がいた。
クールで、格好良くて、厳しくて、でも優しくて。
それで、とても可愛くて。
僕の愛する人が。

「なんで、どうして……」
「あなたのことが好きですから」
「私は君にあんなずるいマネを……」
「いいですよ。もう、過ぎたことですから」
「でも……」
そっと、唇を。

「……え？」
「何も言わなくていいです。わかってますから」
この人は僕のことが好き。
僕はこの人のことが好き。
理由はそれだけで十分だった。
たとえ、それまでに何があったとしても……。

「先輩。大好きです。付き合ってください」
「……っ……はい！」
新月先輩は、泣いていた。
その顔は、何よりも輝いていた。

あとがき

何を書いているんだ？ 久々にギャグを書こうかと思ったら途中で前作のなんちゃって叙述トリックと同じ雰囲気になってきたのでギャグ方向に向かったつもりが謎の純愛方向に向かって行きました。結果としてギャグがやりたかったのか、不条理がやりたかったのか、叙述トリックがやりたかったのか、意味不明な変なヤツが生まれてしまいました。報道部現役時代のヒカルと今のヒカルを合わせたらこんな感じですね。どういうカンジだよ。とまあ、×切当日の17時から書き始めてこんな感じになったんですよ。褒めてくださいよ。それに、年上の女の人書いたのも多分初めてだと思います。新月先輩の過去とかも気になりますが、それらを書いていたらキリがない。短く、さらっと。原点回帰のヒカルでした。(まったく回帰出来てないのは突っ込まない)

二、続・導入

依頼主の家を出る。家の裏側に周り、池の畔に立った。対岸に目を凝らすと、離れている上に少し霧が出ているためかろうじて木が見える程度だ。

どうしたものか。

泳ぐのは体力が消耗するし、明らかな時間短縮になるわけでもない。ここは池の外周を走るのが一番良い選択だろう。なにせ金が無い。水の上を走るのもできないことはないだろうが道具を消耗して金がかかる。

そうと決まれば、と池を右回りで走る。なぜこの方向に走ったかというのは完全に勘だ。しかし意外に勘も侮れないらしく、進むに連れて霧が濃くなってきた。普通、霧は陽が昇るにつれて晴れるはずだが、この尋常ではない視界の奪われ方はおそらく魔物の仕業だろう。つまり敵に近づいている。俺はぐんと速度を上げた。

ふと、左手に見ている水に違和感を覚えた。立ち止まって注視する。しゃがみ込み、水に手を入れてみると、微かだが流れができています。

池と川の境目か。だが、走り始めた頃よりずっと霧が濃くなっていて、近くの木が二、三本と足元の水しか見えない。参った。これでは一体どこが対岸なのか、大雑把な見当すら付かない。太陽の光で方角がわかる分、池の上を進んでいたほうがマシだったかも知れない。池が円に近い形であれば太陽の方向か

ら位置が割り出せるかもしれないが、川が合流している時点で決め手に欠ける。なるほど、ただ単純に食い殺す、か。こつこつと霧の中で待ち伏せているだけで獲物は勝手にやって来るわけだ。

だが腑に落ちない。夢とは必ず覚めるもの。少年の悪夢が『白昼夢』となって現れたこの夢の魔物が、この方法を使って少年の夢の中で百人も食い殺せたとはいえない。拱いているだけではせいぜい十人が関の山だ。

『ええと……虎の見た目で、それはもうただ単純に食い殺していたと』

もう一度、聞いた話を思い出す。

素直に受け取ると、俺が霧の中で迷っている時点で既に話が違う。そして少年は夢の中で人々が食い殺される様を少なくとも見ていたはずだ。

ただし夢というのは起きれば曖昧になり、かと言って、手記に書きつけて鮮明に覚えれば気が狂う。自分自身のみが見ることを許されるものなのに、その手には絶対に掴むことができない。ましてや他人がどうこうできるものではない。俺がいくら憶測したところで糞の役にも立たないのだ。

俺は序列が一や二の魔物にも散々苦勞させられてきた。そういつときは必ず、夢というものを掴みあぐねていた。今回はそういう失態はできない。

決めた。

俺は腰に付けていた袋から古びた杖を取り出した。気は進まないが致し方ない。人命のため、報酬のため。使いどころを考えなければ宝の持ち腐れだ。

直立し、右手に杖を握り、自分の真下から吹く強烈な風を想像する。と同時に杖があまり擦り減らないように祈る。想像は鮮明であればそれでいいが、祈りは強くなければいけない。夢が宿った杖というのは死ぬほど高いんだ。

充分祈れたら跳躍する。地面を蹴った勢いそのままに下から突風が吹き、風

に押し上げられて高く高く飛ぶ。

木々をすり抜け、霧を抜け、空へ。

ようやく、視界がまともになった。直後、下を見ると奇妙なことに気が付いた。俺が完全に迷ったのは対岸まで中ほどといったところに流れ込んで川に近いところだったが、そこだけ濃い霧が立ち込め、それ以外はほとんど晴れている。だが、俺の通ってきた道だけ薄つすら霧が残っていて、村にたれこんでいる。

落ちながら少しだけ考える。件の対岸の洞窟はここからよく見えるが、霧は少ない。こうして空から見れば妙な分布を示している霧は魔物のもので間違いないだろうことは一目瞭然だ。つまり、魔物は既に洞窟にはいない。

俺は空中でもう一度折る。風が吹く方向は、村。特にあの霧がうつすら立ち込めているところの直ぐ側にある民家だ。

強い風が吹く。風に乗って体を翻し、両足を目標めがけて突き出す。

ぐんぐんと地面が近づいてくる中、民家から住民が出てきた。すると傾合いを見計らったかのように、すぐそばまで垂れこめていた霧が一瞬で姿を変えて虎になり、大口を開けた。

突然の出来事に立ちすくむ村人を虎が食おうとする直前、まさに間一髪のところまで加速した蹴りが虎の胸に直撃する。虎は横倒しになり、蹴りの衝撃と虎の体重で地響きが起こった。あたりに土煙が舞い上がり、視界が悪くなっている。

俺の足は胸にめり込んではいないものの、表皮すら貫通できていないようだった。しかし足が抜けやすいことは好都合だ。すぐさま虎の上を走り、頭の方へ向かう。虎は朦朧としているようだったが、俺が脳天にもう一発入れようとする

ると低い声で唸りつつ立ち上がった。振り落とそうとしているようだ。大きく動くその前に虎の頭頂部の毛を左手で掴み、右手に握った杖に意識を集中して祈る。瞬きするその一瞬で杖は短剣になった。暴れる虎の後頭部にそのまま突き刺す。

虎の咆哮はさらに大きくなり、村に危険を伝える。これで戦いやすくなるだろう。だが、優位に立てている間にできるだけ傷を与えておかなければ。

左手が離れそうになるのを耐え、何度も同じところを刺す。短剣なので一度の傷は浅いが抉れはいくらでも深い傷を与えられる。

ちょうど十回ほど刺したところで、ついに振り切られて吹っ飛ばされる。民家の壁に当たり、衝撃は和らげられた。瓦礫の中からすぐさま立ち上がり、来るであろう追撃を躲すため、民家の奥へ飛び退く。案の定、俺が飛ばされたところに虎の前足が飛んできた。轟音とともに叩きつけられ、砂埃を巻き上げる。それ目掛けて全力疾走する。同時に祈り、短剣を長剣に変える。走って行く勢いをそのままに、虎の足首をすれ違いざまに切りつけた。

一際大きい虎の雄叫びがあたりに響き渡る。虎の懐に入り、後ろ足を切る。と同時に虎が覆いかぶさってきた。間一髪のところ、一転がりながら後ろ足の間から背後に抜ける。すぐに虎の方へ向き直ったが、後ろ足の蹴りが飛んでくる。

これはさすがに避けられない。剣で防御するのが精一杯か――。

直撃を食らい、吹っ飛ぶ。すさまじい勢いで地面を転がり、虎からずいぶん遠くまで飛ばされた。立ち上がるために地面に左手をつくが、激痛で力が入らない。折れているようだ。右手は大丈夫なようだが、非常にまずい。当たりを見回して剣を探すと案外と近くにあることが幸運だ。よろけながら立ち上がり、

剣を拾って虎のほうを向く。走ってまてているようだ。がやつも前足と後ろ足を傷んでいるからこの距離を一気に詰めることはできないだろう。剣に向かって祈り、杖に戻す。最初に比べてもう四分の三ほどの長さになっていた。これだから嫌なんだ。

だが負けてしまったって浪費になる。それだけは回避しなければならぬ。

杖に祈る。まさかこれほどまでの強さとは思わなかった。消費はもろろん惜しむが、力の出し惜しみはしない。目を閉じて、想像を巡らせる。左腕の痛みは和らぎ、感じていた疲労もなくなる。目を開けると、杖はさらに半分ほどなくなっていた。悲しい。と、そうこうしている間に虎は目前まで来ていた。俺は悠長に袋に杖をしまう。

直後、虎は負傷していないほうの前足を先と同じように振り下ろした。俺は左手で受け止めた。左へ受け流して、地面に着くそれを蹴った。骨の折れる音が聞こえ、血が吹き出す。虎が平衡を失ったところへ、さらに跳躍し真上にある虎の顔を片手で掴み、もう片方で殴る。俺が着地すると同時に虎は倒れた。虎の頭の方へ歩み寄る。ぐったりしてもう動かない。

動物の姿をしているとつい同情しそうになるが、本来は現実にはいないものだ。人の悪夢が創り出した魔物。大人しく夢の世界にお帰り願おう。

腰を深く落とし、腕を引く。虎の側頭部に本気で拳をいれる。頭骨の割れる音と内容物が行き場を失って溢れる音がする。

「はー……」

ため息を一つ。自分の服を見ると、血と泥にまみれている。これを見ると正しいことをした気分にはならない。

「依頼者と村長に報告して帰るか」

近くの池で水浴びをしてから、依頼者の家を尋ねた。奥さんは頭を下げ、お礼にと昼食をご馳走してくれた。次に村長のおじいさんの家に行くと、「虎の処理は任しんじやい」とにつこり笑ってくれた。

これで一件落着。あとは依頼役場だな。報告に行こう。

帰りの山道を登っていると、水風みかぜが道に立ちはたかっていた。

「何してるんだ？」

「貴方、あんな化け物を拳一つで倒すなんて……いつもあんなことをしているわけなの？」

「もちろんだ。炎やら氷やら、そこにないものを創り出す魔法よりすべにあるものを強化するほうが杖を消耗しないだろう？」

水風は苦笑いした。

「阿呆ね」

「倒せたんだからいいだろ」

「相手によっては全く通用しないわ。いつか苦労することでしょうね」

「そのときはまた何か考えるな」

俺が笑うと水風は顔を背けた。

「それで死ななければいいわね」

少し怒気をはらんだ声色で言い放ち、早足で歩き始めた。俺もその後を追う。

その時、遠くから何か妙な呻き声が聞こえてきた。獣のような、虫のナギめきのような、何とも不快な音……依頼に向かう途中で聞いたものと全く同じだ。完全に失念していた。しかし、前よりはつきりと聞こえる。

その音はなぜだか、俺を呼んでいるようだった。

二、完

○なかがき

どうですか。

「さてなぜ「あとがき」ではなく「なかがき」なのか？」

「これから別作品が始まります。と言っても二本同時並行というわけではありません。「永遠に続く白昼夢を」はあまりにも見切り発車が過ぎたので書き続けるのに耐えず、「このキリが良いところ」で終わって別作品を書きながら設定を詰めるようにというわけです。」

まあ、次回書くときは二話目から、しかもほとんど別物になっているでしょう。いやあ途中で打ち切るといっことはとても珍しいことなので勘弁して下さい。なんでもはしません。

というわけで冒頭だけです新しいのが始まります。タイトルすら決まっていないのに大丈夫か？ 大丈夫です二の舞いにはなりません。

そもそも次作品は一年くらい温めたものであり、「小説家になろう」にぶち込む予定のものが、いつまで経っても全然「ス」は書きやがらないのもうこっちで書きます。完結して出来が良ければ全編通して推敲してNAROUに突っ込むと思います。

あと「永遠に続く白昼夢を」は練習の意味合いが大きい物でした。まず、書いたことのない戦闘シーンを描くの、普段やらない詳細な風景描写。その上でカタカナ縛りをしてました。これが案外辛くてですね、カタカナ使えないと「詰んだ。ウー」ということが多発するわけですね。たぶんその分語彙力とかが上がって文章のチープさが減るかな？ とか思ったんですけどね。まあよい練習になったと思います。

さてここから次回作が始まります。でもあとがきはありません。ではでは。

(タイトル未定)

TK

桜色の高校生活が始まり、同時に一人暮らしもスタートした。肥溜めのような家庭環境からオサラバして、ついに俺は自由になった。

入学式が終わって、帰り道を歩きながら帰ったら何をしようか想いを馳せる。まだ引越しの荷物は片付いていないが、それをさっさと終わらせてゲームやりたい放題テレビ見たい放題ネットサーフィンしたい放題だ。

ああ天国だ。俺の天国がもうすぐそこに来ている。

たまらず駆け出し、道を行く。遠くにボロいアパートが見えてきた。そう、あれが我が城、竹田ハイツだ。大家さんが竹田さんというだけのシンプルなネーミング。いやそんなことはどうでもいい。

靴から鍵を取り出し、いざ楽園への扉を開く。

透き通るほど蒼くて雲ひとつない空が広がり、遠くまで続く青々とした草原とほつぽつ生えている木々が風に揺れる。そうしてその向こうには大きな城がそびえ立ち、城下には町が栄えている。壁は白く、カラフルな屋根が並び、ところどころ突き出た煙突から煙が昇っている。しかしおかしな、明らかに城なのに城壁がない。

「つてもっとおかしなところがあるだろう！」

靴を地面に叩きつけた。どうなっているんだ。どうしちまったんだ俺の城。

扉を開けたら、ファンタジーが広がっていた。

To be continued...

ヒカルです。ギャグ要素の強いラブコメです。

いつものヒカルです。前は一体何だった？

わかりません。そういや、そろそろ本命の

小説の前半部分が完成しそうです。

完成したあかつきには、どうしましょう。

SAIHIKA に入れたら 100 ページヒカルなんて

事になってしまいます。まあ、なんとか

するでしょう。というわけで今月も

読んでいただきありがとうございます。

無事(?) 2冊目の刊行となりますね。

続いてよかった。一回毎の文章量が少ないのも

そのうちブランクを取り戻して現役時代のように

八千文字から一万文字くらいになるでしょう。

ゆくゆくは文化祭での最高記録三万八千文字を

超したいところですがあれは四日間書き続けた

のでたぶん無理ですね。(後半は死んだ目になって

ました。遅筆は辛いものです。作品によって書く

速度は変わりますが今回の原稿は過去最低レベル

でしたね。) では次回までさよ一ならー T.K



From Writers

こんばんは。鵜和です。前回のふろむでこの人大丈夫かな？

と思われた方もいるかもしれませんが眠いと人間は

あんな感じになります。おわかりですね。二度寝って

良いですよ。好いですよね。善ければいいんですけどね。

それではまた、どこかで。お休み下さい。

どうも、マウスです。今回のフロムは砂丘でいきました。原稿を落としたので最低限のPR活動です。

ちゃんと書いてたらまた面白い厨二学でも紹介するつもりでしたが、そうはいかなかったので出す予定だった小説を三行でまとめます。

帰ってきた主人公を迎える狐耳巫女

→主人公と狐耳巫女の力でお祭り

→主人公と狐耳巫女がケッコン(真)

そうですね、完全に趣味ですね。